〔課程-2〕

審査の結果の要旨

氏名　小林京子

本研究は、維持療法中の小児急性リンパ性白血病児とその同胞と両親の QOL を明らかにすること、家族員間の QOL の相違を検討することともに、両親の QOL への関連要因を探索することを主要な目的としたものであり、下記の結果を得ている。

1. 急性リンパ性白血病児の QOL は、健康児の QOL よりも「身体的機能」と「学校の機能」が有意に低く（Mann-Whitney の U 検定：p＝0.001、0.001、効果量：1.18、0.98、z 値：4.86、4.02）この 2 側面に対する支援の必要性が明らかになった。がん特異的 QOL については、「コミュニケーションについて（58.9 点）」「吐気について（60.0 点）」「認知について（67.3 点）」が低得点であった。
2. 急性リンパ性白血病児の同胞の QOL は、平均点および中央値からみると良好であったが、健康児の得点から得たパーセンタイル値に当てはめると、特に「感情の機能」と「社会的機能」について 25 パーセンタイル値以下の低い QOL を示す同胞がいることが明らかになった（身体的機能：12.5%、感情の機能：37.5%、社会的機能：31.1%、学校の機能：25%、心理社会的合計：25%、合計得点：12.5%）。
3. 両親の QOL の関連要因の検討に、これまでの先行研究の知見を検証したモデル 1、家族のニーズの充足の関連を検討するためのモデル 2、在宅で治療を継続するという維持療法中の特徴を捉え、家族機能を追加したモデル 3 を比較した結果、モデル 3 が最も良好なあてはまりを示した（補正赤池情報量基準の変動はモデル 1 より-32.80，モデル 2 より-29.02）。急性リンパ性白血病児の両親の QOL は、病児の疾患や両親の特性のみではなく、家族機能を考慮することの重要性が示された。
4. 両親の QOL への関連要因を一般化線形複合モデルを用いて検討した結果、特

性不安（p＝0.013）、主観的治療強度（p＝0.035）、家族のニーズの充足（p＝0.004）が関連した。家族のニーズの充足が最も QOL を予測し、ニーズが充足されているほど QOL が高くなることが明らかになった。そのため、家族のニーズのアセスメントとニーズの充足のための支援が重要になることが示された。また、家族機能のきずなの「バラバラ型」の両親の QOL が有意に低下していた。

5. 家族員間でQOLへの関連は異なり、病児では、リスク分類、主観的治療強度のいずれも関連は弱く、ソーシャルサポートは父親からのサポートへの期待とのみに中程度以上の正の関連（ρ＝0.45）がみられ、特性不安が最も強い負の関連を示した（ρ＝0.47）。支援は、病児の性格特性を捉えた上で、治療や生活への不安の軽減と身体状態を向上させる働きかけが重要になることが示唆された。同胞は特性不安よりも希望との関連が強く（ρ＝0.51）、主観的な治療強度とQOLに負の相関があり、病気への理解の度合いとの関連、父親および母親からのサポートへの期待との強い正の相関（それぞれ、ρ＝0.67, 0.62）が示され、教師からのサポートへの期待との中程度の関連があった（ρ＝0.38）。同胞は、病児の状態に左右されやすいと考えられ、同胞が周囲からの支えを認識し孤独感を軽減できるような支援としての病気・病状説明を含むコミュニケーションが重要であると考えられる。両親は、性格特性、疾患に関する要因、家族機能、サポートニーズが有意に関連し、家族全体の状態を考慮しつつ、個人に対しての支援を行うとともに、特にニーズが充足されるよう、医療者がアセスメントと支援を行うことが重要である。

以上、本研究は、維持療法中の急性リンパ性白血病児とその同胞、両親の QOL を定量的なデータにより学術的に示すとともに、両親の QOL への関連要因を明らかにし、家族員間の QOL の相違を示した。これまで日本では、診断名と治療時期を限定して、病児と同胞と両親という様々な家族員の QOL とそれらの相違を明らかにした研究は見当たらず、本研究は、病児と家族員を含めた家族のひとまとまりに着目し、それぞれの家族員の QOL と家族員間の相違の探索を試みたわが国初の研究と位置づけられ、今後の小児急性リンパ性白血病児と家族への支援構築への重要な貢献をなし得ると考えられ、その意義は大きい。よって、本研究は各位の授与に値すると考えられる。